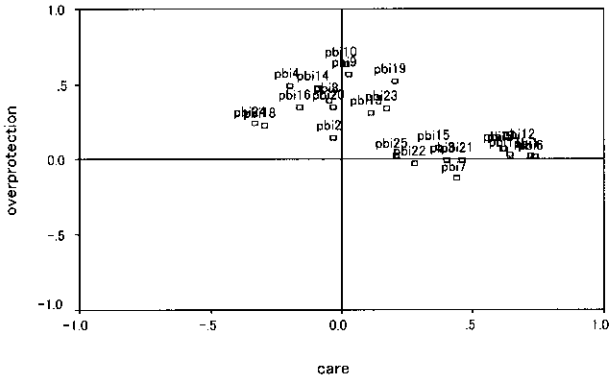
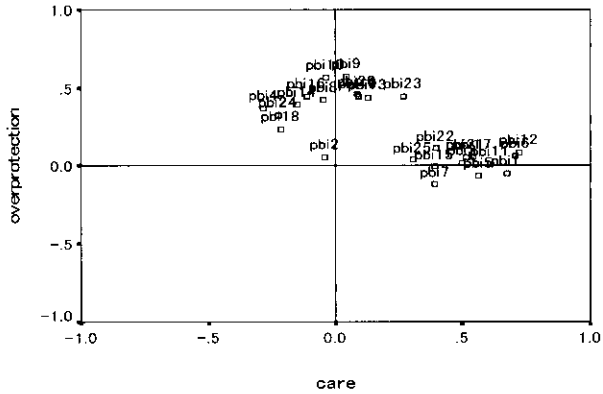
図 5: 男児が現在，父親から受けている被養育体験

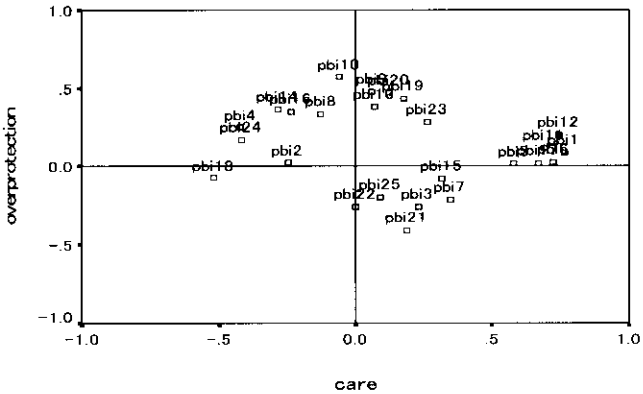


CmaleF: 男児が現在父親から受けている被養育体験

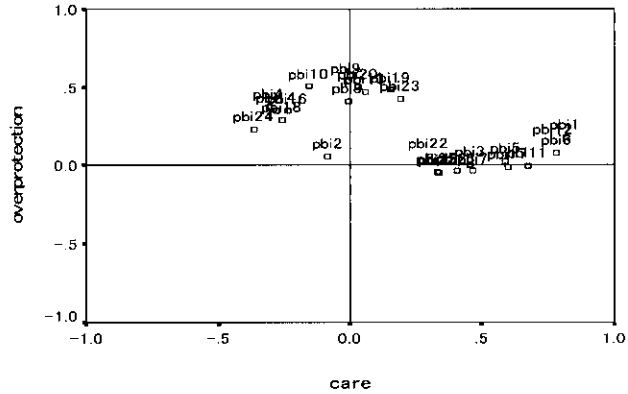


CmaleM：男児が現在母親から受けている被養育体験

図 6: 女児が現在，母親から受けている被養育体験



CfemaleF：女児が現在父親から受けている被養育体験



CfamaleM：女児が現在母親から受けている被養育体験

PF	PM	Fgf	Fgm	Mgf	Mgm
−0.543	−0.540	−0.535	−0.477	−0.540	−0.571

表 2: 2 因子間の相関係数(親世代)

PF: 親が自分の父親から受けた被養育体験 PM: 親が自分の母親から受けた被養育体験 Fgf: 父親が自分の父親から受けた被養育体験 Fgm: 父親が自分の母親から受けた被養育体験 Mgf: 母親が自分の父親から受けた被養育体験 Mgm: 母親が自分の母親から受けた被養育体験

CF	CM	CmaleF	CmaleM	CfemaleF	CfemaleM
−0.372	−0.452	−0.421	−0.449	−0.447	−0.451

表 3: 2 因子間の相関係数(子ども世代)

CF: 子どもが現在父親から受けていると知覚している被養育体験 CM: 子どもが現在母親から受けていると知覚している被養育体験 CmaleF: 男児が現在父親から受けていると知覚している被養育体験 CmaleM: 男児が現在母親から受けていると知覚している被養育体験 CfmaleF: 女児が現在父親から受けていると知覚している被養育体験 CfmaleM: 女児が現在母親から受けていると知覚している被養育体験

親の世代と子どもの世代の間での知覚する被養育体験の相違点

図 1〜図 3 の親の世代の因子負荷プロットと異なり，図 4〜図 6 までの子どもの世代の因子負荷プロットでは，2 因子の分化が不十分である．養育する側が母親である場合に未分化の程度が強い．それでも care，overprotection の逆転項目，非逆転項目の 4 つのグループに属する質問群は塊をなしており，完全な未分化ではない．

表 2 と表 3 を比較してみると，親の世代においては子どもの世代よりも 2 つの因子の相関が強いことが分かる．つまり親においては，care と overprotection がより強い負の相関を持つことが分かる．

養育される側の性別による被養育体験の相違点

親の世代の被養育体験において，母親では 2 つの因子が比較的明確に分かれ，Parker ら(1979) のもともとの概念に近い因子で過去の被養育体験を評価するのに対し，父親ではこの分化が若干不明確である．特に父親がかつて自分の母親から受けた被養育体験において強い傾向がある．つまり，父親ではもともと overprotection の逆転項目としての質問である「自律，独立の尊重」を care として知覚する傾向が強く，care の逆転項目としての質問である「無関心，拒絶」に関する質問項目を overprotection として知覚する傾向がある．

男児と女児を比較してみても，親の世代と類似した違いが見られる．子どもの世代においても養育される側の被養育体験は，性差によって影響を受ける．男児の場合は care に関する逆転項目に関する質問群と overprotection の非逆転項目に関する質問群が一体化する傾向を示すのに対し，女児の場合はこのあたりの区別が男児よりも明確で特に父親からの被養育体験に対する知覚に関してその区別は顕著である．つまり親の世代の同様に男性では「無関心，拒絶」に関する質問項目を overprotection として知覚する傾向が女性よりも強い．母親からの被養育体験に対する知覚に関しては男児，女児ともに，care の逆転項目と overprotection の非逆転項目の一体化傾向が強く見られた．母親に対しては男児女児ともに「無関心，拒絶」に関する質問項目を overprotection として知覚するのである．さらに子どもの世代でも父親からの養育に対しては，女児は「自律，独立の尊重」という概念を持ちやすく，男児は overprotection の逆転項目を care として認識している．

養育する側の性別による被養育体験の相違点

親の世代，子どもの世代に共通して見られるのは，養育する側の親が父親の場合は 2 つの因子の分化の程度が高く，養育する側の親が母親の場合は 2

因子の分化の程度が低いことである．特に女性が父親からの被養育体験を評価するとき，「自律，独立の尊重」を一つの概念として持つ傾向にある．

各質問項目群の中での因子負荷量の差異

care の非逆転質問項目

これに関しては，Parker ら (1979) のものと一致しており，どの項目も care に対する因子負荷量が高く，overprotection の因子負荷量は低い．

care の逆転項目

この中で，'私が必要なことや望んでいることに理解を示さない' '私に，自分はのぞまれていない子どもだと思わせる' は，overprotection に対して正の因子負荷量をかなり高く持っている．

overprotection の非逆転項目

'私を子ども扱いすることが多い' '私を父親 (母親) に頼らせようとする' '父親（母親）がそばにいないと自分のことができない子だ，と私の事を考えている' に関しては若干 care が入る傾向が入り '過保護だ' に関しては care の要素がかなり強くなる．

'大人びてくるのを喜ばない' に関しては，overprotection の質問項目の中でも，care の軸においては負の方向に知覚され，無関心，拒絶的と知覚される傾向が強い．

それに対して，他の '私がしようとする事を全てにわたってコントロールしようとする' '私のプライバシーを侵害する' という項目は，overprotection に対する因子負荷量が前述の項目群よりも高く見られ，care の因子負荷量はほとんどない．

overprotection の逆転項目

自律，独立の尊重を表す質問項目群であるが，先に述べたように養育を受ける側の性，世代や養育を与える側の性によって，自律，独立の尊重と知覚されたり，care と知覚されたりする．女性が父親に対しての被養育体験を評価するときに，「自律，独立の尊重」という概念で知覚しやすい．

因子構造モデルの作成

養育される側の性別，年齢，養育する側の性別を説明するモデル

我々は図 7 のような因子構造モデルを作った．因果係数 (causal coefficient) は表 4 のようになった．

Parker らの質問紙票の care の非逆転項目の点数の総和を CARE_P として示した．care という因子に対する因果係数は＋0.93 であり，ほぼ care の概念で説明できている．

Protection_N は，Parker らの質問票の overprotection の逆転項目の点数の総和であるが，overprotection という因子に対する因果係数 は－0.87 であり，ほぼ overprotection の概念で説明できる．

だが，CARE_N と，PROTECTION_P に関しては，それぞれ care の逆転項目の点数の総和と overprotection の非逆転項目の点数の総和であるが，因果係数は－0.68 と＋0.38 といったように，care と overprotection の概念では説明できない．この二つの観測変数の総和に対する誤差変動間の相関は＋0.40 である．次に，世代や養育を受ける側の性別，養育を与える側の性別が，このモデルにどのように影響するかを検討した(表 5)．

養育される側の性別で考えると，性別が男性のほうが同じ質問項目でも overprotection の因子よりで捉え，女性のほうがより care 側の因子で捉える．

養育される側の世代では，さほど有意な係数の値は出なかったが，大人になるにつれて，やや overprotection の因子側に捉える傾向が強くなるようである．

養育する側の性別に関しては，相手が父親の場合はより overprotection の概念で捉えるのに対し，相手が母親の場合はより care の概念で捉える傾向が強いようである．つまり，同じような養育をしても，父と母とでは子どもからは違った因子で捉えられる．

次にこのモデルの適合度であるが，GFI は 0.992，AGFI は 0.976 で，さらに RMSEA は 0.053 と出ており，モデル適合度はよい．

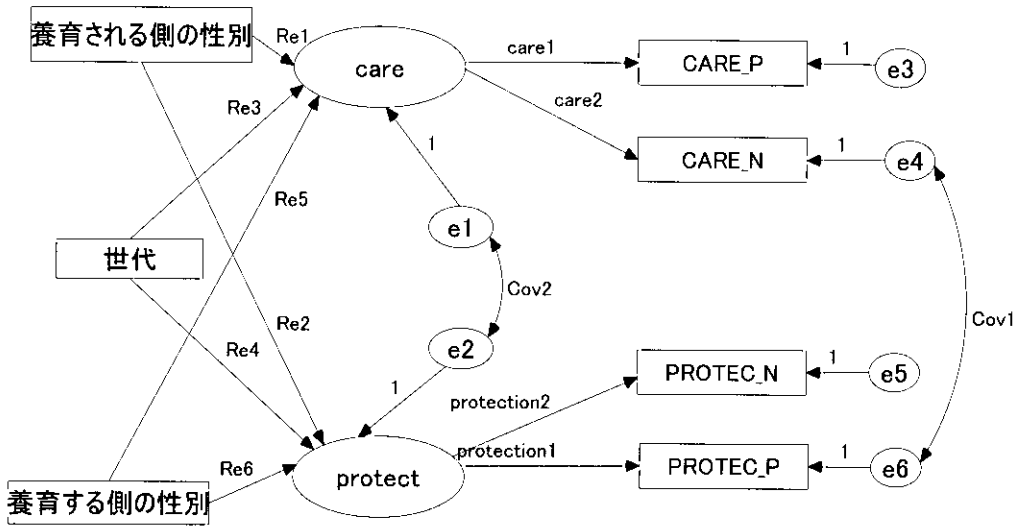
care1	care2	protection1	protection2	Cov1
＋0.93	－0.68	＋0.38	－0.87	＋0.40

表 4：因子構造
モデルの標準化された因果係数

Re1	Re2	Re3	Re4	Re5	Re6	Cov2
+0.10	−0.09	−0.09	+0.02	+0.23	−0.06	−0.65

表 5：因子構造モデルの標準化された因果係数

図 7：PBI の因子構造モデル
養育された側の性別：男 0 女 1　世代：被養育者が小中学生：0 被養育者が小中学生の子どもを持つ親 1 養育する側の性別：男 0 女 1　care_P：care の非逆転項目の総和　care_N：care の逆転項目の総和 protection_N：overprotection の逆転項目の総和 protection_P：overprotection の非逆転項目の総和



養育される側の性別，年齢，養育する側の性別を説明するモデル

図 7 と表 5 の結果，子どもの世代より親の世代のほうが，care の因子よりも overprotection の因子で被養育体験を評価する傾向にあった．この世代の差は，時代の変化とともに因子構造モデルが変化をしていくのか，それとも子どもの発達という過程が因子モデルに影響を与えるのか，それとも親の世代になることで因子構造が変化するのかを探求するために，図 8 のようなモデルを作った．図 7 と異なるのは，世代の代わりに年齢を観測変数として入れていることである．そして発達の過程にある子どもの世代と親の世代を一緒に解析することは不適切であると考え，このモデルを親の世代，子どもの世代のそれぞれについて別個に検討した．

その結果，因果係数について述べると，親の世代では Re3 は−0.00，Re4 は+0.01 であり，この年齢の影響を無視しても，つまり Re3，Re4 ともに 0 であると仮定したところ，GFI は 0.976 から 0.975 に，AGFI は 0.924 から 0.938 に，RMSEA は 0.098 から 0.089 に，AIC は 269.016 から 265.251 と変化し，全般的に年齢を考慮しないほうがモデルの適合度が僅かながら良いことが分かった．親は年齢を重ねても，過去の被養育体験の因子構造は変化しない．従って親の世代では年齢によるモデルへの影響は無視できる．

しかし子どもの場合の因果係数を見てみると，Re3 は−0.11，Re4 は−0.11 であり，この年齢のモデルへの影響を無視すると，GFI が 0.996 から 0.986 まで低下し，AGFI は 0.988 から 0.965 まで低下し RMSEA が 0.028 から 0.062 まで上昇し，AIC が 56.346 から 101.857 にまで上昇する．つまり，年齢差がなくてもモデルの適合度そのものは

悪くないが，年齢を考慮したほうがさらにモデルの適合度は良くなるのである．従って，子どもでは小学校5年から中学校3年までの間では年齢が増えるごとに，care，overprotection の因子で被養育体験を知覚する傾向が少なくなると説明され得る．さらに子どもの世代における年齢の影響を男女別で調べた．男児では Re3 は－0.12 で Re4 は－0.11，女児では Re3 は－0.11 で Re4 は－0.12 であったため，この年齢幅においては，年齢の因子構造モデルへの影響における男女差は微小なものであった．

図8：被養育者の性別，養育者の性別，年齢による影響を説明するモデル

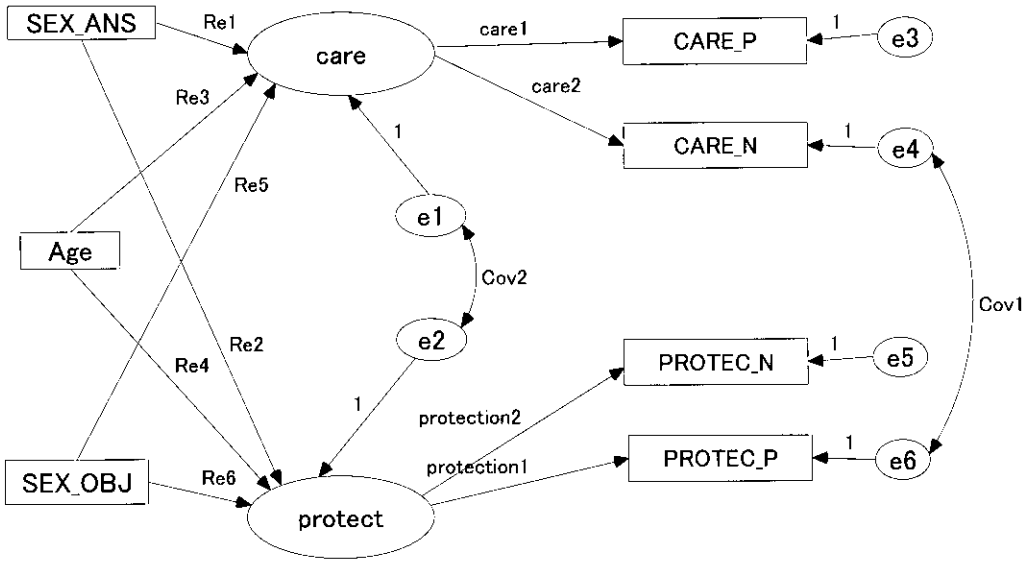


表 6: 父親の被養育体験の子どもの被養育体験との相関係数

	Fgf care	Fgm care	Fgf protect	Fgm protect
CF care	+0.111	+0.208	−0.101	−0.137
CF protect	−0.096	−0.138	+0.173	+0.144

Fgf care: 父親が自分自身の父親から受けた care Fgmcare: 父親が自分自身の母親から受けた care Fgfprotect: 父親が自分自身の父親から受けた overprotection Fgmprotect: 父親が自分自身の母親から受けた overprotection CFcare: 子どもが父親から受けている care CFprotect: 子どもが父親から受けている overprotection

表 7: 母親の被養育体験と子どもの被養育体験との相関係数

	Mgf care	Mgm care	Mgf protect	Mgm protect
CM care	+0.035	+0.060	+0.031	−0.005
CM protect	−0.060	−0.048	+0.063	+0.051

Mgf care: 母親が自分自身の父親から受けた care Mgmcare: 母親が自分自身の母親から受けた care Mgfprotect: 母親が自分自身の父親から受けた overprotection Mgmprotect: 母親が自分自身の母親から受けた overprotection CMcare: 子どもが母親から受けている care CMprotect: 子どもが母親から受けている overprotection

育児の世代間伝達

次に育児様式の世代間伝達を調べるために，子どもが現在の被養育体験の中で知覚している父母からの care，overprotection と，父母がかつて祖父母から得られたと知覚している care，overprotection とのピアソンの相関係数を見た．点数化は本来の Parker らの方法を採用し，care の非逆転項目から逆転項目を差し引いたもの，overprotection の非逆転項目から逆転項目を差し引いたものを算出して使用した．全ての組み合わせにおいて，世代間における care と overprotection の間の相関に有意なものは見出せなかった(表 6, 7).

また，今回の我々の因子分析で care，overprotection ともに，非逆転質問項目と逆転質問項目は必ずしも正反対の意味ではないので，非逆転項目と逆転項目の点数の差を使用することは，正確性に欠け，逆転項目と非逆転項目の直接的な効果を一貫性なく相殺しあってしまうと考えた．そこで我々は，子どもが，現在の被養育体験の中で知覚している父母からの care，overprotection と，父母がかつて祖父母から受けたと知覚している care，overprotection との間のピアソンの相関係数を非逆転項目と逆転項目各々について計算した(表 8，9)．しかしやはり全ての組み合わせにおいて世代間における care と overprotection の間の相関に有意なものは見出せなかった．

	CF care (P)	CF care (N)	CF protect (P)	CF protect (N)
Fgf care (P)	+0.121	−0.049	+0.035	+0.146
Fgf care (N)	−0.125	+0.042	−0.011	−0.133
Fgf protect (P)	−0.136	+0.089	+0.073	−0.162
Fgf protect (N)	+0.072	−0.012	−0.018	+0.178
Fgm care (P)	+0.216	−0.124	−0.018	+0.156
Fgmcare (N)	−0.174	+0.133	+0.018	−0.162
Fgm protect (P)	−0.110	+0.110	+0.042	−0.163
Fgm protect (N)	+0.127	−0.054	−0.048	+0.103

表 8: 父親の被養育体験と子どもの被養育体験との相関係数(逆転項目，非逆転項目別)

Fgf care(P): 父親が自分自身の父親から受けた care に関する質問の非逆転項目の総和 Fgf care(N): 父親が自分自身の父親から受けた care に関する質問の逆転項目の総和 Fgmcare(P): 父親が自分自身の母親から受けた care に関する質問の非逆転項目の総和 Fgmcare(N): 父親が自分自身の母親から受けた care に関する質問の逆転項目の総和 Fgfprotect(P): 父親が自分自身の父親から受けた overprotection に関する質問の非逆転項目の総和 Fgfprotect(N): 父親が自分自身の父親から受けた overprotection に関する質問の逆転項目の総和 CFcare(P): 子どもが父親から受けている care に関する質問の非逆転項目の総和 CFcare(N): 子どもが父親から受けている care に関する質問の逆転項目の総和 CFprotect(P): 子どもが父親から受けている overprotection に関する質問の非逆転項目の総和 CFprotect(N): 子どもが父親から受けている overprotection に関する質問の逆転項目の総和

	CM care (P)	CM care (N)	CM protect (P)	CM protect (N)
Mgf care (P)	−0.005	−0.042	−0039	+0.040
Mgf care (N)	−0.025	+0.080	+0.075	−0.027
Mgf protect (P)	−0.003	+0.012	+0.099	−0.038
Mgf protect (N)	−0.066	+0.016	−0.017	+0.028
Mgm care (P)	+0.049	−0.065	−0.009	+0.035
Mgmcare (N)	−0.027	+0.057	+0.039	−0.057
Mgm protect (P)	−0.024	+0.053	+0.108	−0.045
Mgm protect (N)	−0.048	−0.012	+0.020	+0.020

表 9: 母親の被養育体験と子どもの被養育体験との相関係数(逆転項目，非逆転項目別)

Mgf care(P): 母親が自分自身の父親から受けた care に関する質問の非逆転項目の総和 Mgf care(N): 母親が自分自身の父親から受けた care に関する質問の逆転項目の総和 Mgmcare(P): 母親が自分自身の母親から受けた care に関する質問の非逆転項目の総和 Mgmcare(N): 母親が自分自身の母親から受けた care に関する質問の逆転項目の総和 Mgfprotect(P): 母親が自分自身の父親から受けた overprotection に関する質問の非逆転項目の総和 Mgfprotect(N): 母親が自分自身の父親から受けた overprotection に関する質問の逆転項目の総和 Mgmprotect(PN): 母親が自分自身の母親から受けた overprotection に関する質問の非 Mgmprotect(N): 母親が自分自身の母親から受けた overprotection CMcare(P): 子どもが母親から受けている care に関する質問の非逆転項目の総和 CMcare(N): 子どもが母親から受けている care に関する質問の逆転項目の総和 CMprotect(P): 子どもが母親から受けている overprotection に関する質問の非逆転項目の総和 CMprotect(N): 子どもが母親から受けている overprotection に関する質問の逆転項目の総和

PBI の再現性:

子どもが複数いるために同じ質問に対して複数回答した親の世代の被験者の，過去の被養育体験の評価の再現性を一覧にした(表 10)．概して，母親のほうが父親よりも再現率が低いことが分かる．特に‘必要なほどに手助けしてくれない’‘私が必要なことや望んでいることに理解を示さない’‘私とあまり喋らない’などの care に関する逆転項目に関しては不一致率が高いようだ．

質問項目	Fgf	Fgm	Mgf	Mgm
PBI1	13/15	11/12	10/20	13/24
PBI2	12/15	10/12	9/21	13/24
PBI3	12/15	10/12	11/21	14/24
PBI4	11/15	11/12	13/21	19/24
PBI5	13/15	10/12	15/21	12/24
PBI6	14/15	11/12	13/21	16/24
PBI7	13/14	11/12	8/20	17/23
PBI8	11/15	12/12	11/21	20/24
PBI9	13/15	12/12	13/21	13/24
PBI10	14/15	11/12	15/21	17/24
PBI11	11/15	9/12	12/20	13/24
PBI12	11/15	9/12	12/21	13/24
PBI13	13/15	11/12	15/21	14/24
PBI14	12/15	12/12	13/21	12/24
PBI15	14/15	12/12	13/21	14/24
PBI16	15/15	12/12	15/21	15/24
PBI17	13/15	10/12	9/21	12/24
PBI18	14/15	10/12	8/21	19/24
PBI19	14/14	11/12	11/21	16/24
PBI20	12/15	12/12	12/21	14/24
PBI21	13/15	10/12	15/21	17/24
PBI22	13/15	10/12	9/21	15/24
PBI23	12/15	11/12	12/21	15/24
PBI24	12/15	11/12	12/21	15/24
PBI25	12/15	9/12	14/21	14/24

表 10: 複数回答した親の過去の被養育体験の再現性

Fgf: 父親がかつて自分の父親から受けた被養育体験 Fgm: 父親がかつて自分の母親から受けた被る養育体験
Mgf: 母親がかつて自分の父親から受けた被養育体験 Mgm: 母親がかつて自分の母親から受けた被る養育体験

E 考察

因子構造モデルに関してのこれまでの論議

1979年にParkerらがPBIを開発した際にはもともとは3つの因子構造をしていたが，第3因子が小さく，第2因子で負の因子負荷量をとる質問項目が第3因子では正の因子負荷量をとることから2因子モデルを適用した．この2因子モデルはいくつかのその後の研究によって支持されてきた(Arrindel ら，1989, Kazarian,ら，1987, Mackinnon ら，1993, Murphy ら, 1997) が，過去の研究で因子構造について2因子ではなく3因子モデルであるという論文もある (Cubis, ら，1989, Gomez-Beneyto ら，1993, Kendler, ら，1996, Murphy ら，1997, Sato ら，1999) ．このモデルの因子構造が2因子になったり3因子になったりするのは，もともとのParkerらの2因子間にはかなり強い相関があり逆転項目は非逆転項目とは意味的に真に逆の意味にはならないことなどから生じるのではないかと思われた．

親の世代と子どもの世代の間での知覚する被養育体験の相違点

世代差についても興味深い結果が得られた．子どものほうが親の養育態度に対しての知覚の仕方の分化の程度が低い．今回の研究では，単に年齢差によるもの，つまり発達途上にある子供だから親の養育態度に対する意味づけが未分化なのか，それとも親の世代においては子どもを持つことによって親としての体験によって育児の質を多面的に理解する傾向が出てくるのか，もしくはここに時代的な背景が絡んでいるのかは明確にできない．しかし少なくとも子どもにとって知覚する養育の質の判断基準は心地よいか不快かという二分的な被養育体験の知覚様式があるということは言えそうである．

もしこの要因に発達的なものがあるとすれば，大人になる過程でさまざまな生活体験を通して知覚様式に深みが出て養育態度に対する知覚様式が分化していくことが予想される．実際に，2因子が未分化とは言え，子どもの PBI の因子構造に

おいても care，overprotection に将来的に発展していくための被養育体験の因子の塊は存在している．であるとすれば，子どもの中でも年齢とともに 2 因子が徐々に分化してくると思われ，中学生と小学生では親の養育態度に対しての反応，解釈が異なりうる．

また親の世代に置いて，2 因子がより強い負の相関を持っているが，このことは大人にとって「care」と「自律，独立の尊重」は近い概念であり，「overprotection」と「拒絶，無関心」はより近い概念であると言える．それでも前述のごとく，子どもの場合と異なり，ある親の行動に対しての意味づけの 2 因子への仕分けは比較的明瞭であり，子どもの場合においては不明瞭で混沌としている．

クラインの内的対象は乳児期を越えて生き残り，大人になっても外的現実の対象に意味と情動的な値を与えるのはこの基底にある空想であると言われる(Hinshelwood, 1994)．だが成長するにつれて洗練されて現実に基づく合理的な思考法によって上塗りされていくとされる．つまり 2 因子の逆転項目，非逆転項目の核ができるのは乳児期であり，その 2 因子の仕分けがしっかりとされるのは現実に即した合理的な思考の結果でありこれができるのは大人以降であるとも考えられる．

養育される側の性別による被養育体験の相違点

親の世代において女性のほうが「自律，独立」という概念を持ちやすく，男性では overprotection の逆転項目に対して care の非逆転項目と近似した意味づけしやすく，この理由として男性の方がより保守的で個人主義よりも集団の中での協調性に重きを起こることから生じるということが想像できる．女性のほうが個人主義的な自律の概念を持ちやすいようである．近代以降の女性運動との関係もあるのだろうか．

興味深いのは子どもの世代においても男児より女児のほうが「自律，独立の尊重」として養育を知覚する傾向が強いことであった．男児は父親の被養育体験の知覚様式を，女児は母親の被養育体験の知覚様式をモデルとして取り入れているのかもしれない．

また，care の逆転項目の質問群に関しては，男性の場合には世代を問わず，父親の無関心や拒絶は overprotection の非逆転項目と一体化し，むしろ無慈悲な攻撃と受け止めるようだ．女性の場合は関心のなさと捉え，積極的な攻撃性ではなく情緒的なネグレクトや冷たさと捉えがちのようである．母親に対しても同様で，男性のほうが care の逆転項目に関しては，overprotection の非逆転項目と一体化傾向にあり，つまり無慈悲な攻撃として受け止めやすい．

この男女差について，我々が個人の知覚様式や個人の本来もつ攻撃性や親子間での脈絡で考察を加えてみる．

まず第一に男性の方が攻撃性がより強いという生物学的な根拠が考えられる．

男児のほうが攻撃性を実際に外に表出する傾向が高く，親の冷たさ，拒絶や無関心をそれに対しての親からの報復として捉えるという脈絡も考えられうる．

また対象関係論的に考えれば，子どもは自己の攻撃性を養育者の中に投影し，それを養育者の攻撃性として知覚するのかも知れない．　つまり攻撃性の強い男児のほうがより親により強く自分の攻撃性を投影するという可能性である．この投影同一化の概念は Klein(1946) によって考えられたものである．つまりこれは乳児の側の憎悪され追放された排泄物が対象の中に投影し，対象を傷つけるだけではなく対象を支配するものであり，その一部は乳児の側に取り入れられ，乳児は内部の迫害者によって攻撃を受けることになるのである．

Klein の投影同一視の考えは乳児側の素質にのみ注目するものである．性差に基づく生物学的な攻撃性の論文を紹介すると男性ホルモンである testosterone と攻撃性の関係は既に認められているが，こういったことも一因をなしているのだろうか (Roland ら, 2000)．

だが Maras ら(2003)は内分泌学的観点から Child Behavior Checklist (CBCL) と testosterone との関連性について 8 歳，11 歳，14 歳の子どもについて研究しているが，男児では testosterone は攻撃性や反社会性行動に関係しているが，女児では関係がなかった．つまり女児の攻撃性には他の要因が関与しているので，testosterone が低い女児が攻撃性が低いということにはならないようだ．

攻撃性の性差に関する遺伝と環境についての論文を紹介すると，Hudziak (2003) らは双子研究をすることで，aggression に対する環境要因と遺伝要因の研究をしている．この論文の中で男女ともに攻撃的な行動は遺伝的要因と環境的要因との両方に起因すると結論付けた上で，男児は女児よりも CBCL によって測定される破壊的行動が多く見られそれが年齢とともに減じていくとしている．男性の場合，拒絶，無関心に関する質問群が攻撃的に捉えられやすいという性差は興味深く，Hudziak の研究結果を対象関係論的に考察すると納得できる．ただし Hudziak らが述べるように，こういった攻撃性は年齢とともに減じていくため，相手にその攻撃性を投影することが少なくなるためか，大人の男性においては子どもよりも拒絶，無関心に関する質問が攻撃と受け止められるようになることは男児よりも少なくなるようである．

ただ，Hudziak の研究で CBCL によって測定された aggression は行動で測定されるものであって個人の内面に持っている攻撃性ではないので CBCL のスコアが高いからと言って攻撃性が高いと言うことは単純に言えない．また CBCL は親が評価するものであり，親の抱える力や親自身の持つ攻撃性やそのときの置かれている心理的状況によっても評価点が変化しうると言う点でも子どもの本来持つ攻撃性とは若干意味が異なるところに難がある．

ここまで，子どもの本来持っている素質と抱える側の親の養育態度の関係から考察を加えてきたが，この考え方は PBI に関する過去の論文でも見られる．PBI は本当の親の行動を評価しているのか，子どもの知覚様式を反映しているのかという議論がなされてきた (Mackinnon, A. J.ら，1990, Parker, G. ら，1989) ．Parker ら(1989) は双子が一卵性であろうと二卵性であろうと高い一致率であったと述べている．つまり PBI は真の親の養育態度を評価するものと結論付けている．

しかし Mackinnon ら(1990) は，PBI の尺度は，真の親の養育態度に加えて家族間の葛藤や同胞葛藤をも反映するものであるとし，親の養育態度と子どもから親へのアタッチメントの関係性について今後検討する必要性を示唆している．

Kenneath ら(1996)は，双子の研究において一卵性双生児のほうが二卵性双生児よりも PBI の一致率が高かった理由として，一卵性双生児のほうが遺伝的に類似の行動を取りやすいこと，親が一卵性双生児の場合平等の育児を心がけること，一卵性双生児のほうが遺伝的に気質が似ているため知覚様式が似ていることの 3 つの可能性を挙げた．そして実際に親に尋ねた場合二番目の可能性は低かったとしている．つまり親の行動を引き出す子どもの要因，その行動をどう知覚するかの子ども側の要因は重要であると述べている．もちろん親の側の気質の重要性についても述べている．

氏原 (1998) は「人間は存在することによって犯し犯されあう」という村本 (1974) の言葉を引用しながら，関係の中ではお互いに変容せざるをえなくて，無意識は外界の事象に投影されることで無意識に意識されると述べている．PBI を被養育者が評価するとき，子どものみの知覚でもなく，親の行動のみでもなく，その行動を引き出す子どもの態度や気質などの相互作用間で生じる体験を象徴しているものではないかと思う．

養育する側の性別による被養育体験の相違点

因子負荷プロット(図 1~図 6) 全体を見ると，母子関係の方が父子関係よりもより 2 因子が未分化になっていて，父子関係の方が，2 因子が分化していて 4 方向にプロットが拡散しやすい．母子関係がより原初的であり，父子関係によってより複雑な被養育体験を育んでいくとも考えうる．興味深いのは，父親自身は過去の被養育体験によって「自律，独立を尊重してもらった」と体験せずむしろ「care してもらった」と体験する傾向が母親よりも強いのにもかかわらず，子どもは父親からは「自律，独立を尊重してもらった」と，そして母親からは「care してもらった」と体験する傾向があることである．母親は情緒的ケア，父親は理性的判断という一般的なスキーマがあるのだろうか．

各質問項目群の中での因子負荷量の差異

PBI では質問が多義的であることから，一つの質問群の中でも，個々の質問間で因子負荷量の大小に開きが見られる．

care の非逆転項目

この項目群に関してはどの質問も care に因子に対して正の因子負荷量を持っており overprotection に対しての因子負荷量が低いことである．その理由として質問が多義的にはとられにくく明確であることがその理由であると思われる．

ただ今回の我々の研究では 2 つの因子間に負の相関関係が見られ，care の非逆転項目は，自律，独立の尊重と重複するところも大きい．

care の逆転項目

この質問群は本来，拒絶や無関心を意味しているが，場合によっては攻撃性にもなりうる質問もある．例えば‘私に自分は望まれていない子だと思わせる’は積極的に思わせるという意味において攻撃性を感じさせる．care の逆転項目の中でこの項目は他の質問項目よりも overprotection のほうにも正の因子負荷がかなり高い傾向にあり，侵入や攻撃性を反映してのことだと思われる．これに関する考察は養育される側の性別による被養育体験の相違点のところで述べた．つまり，親子の相互作用によってどのように子どもが親の養育態度を知覚するかが異なってくる．当然，親と子どもそれぞれの遺伝的な知覚様式も関与していると思われる．

overprotection の非逆転項目

この項目は意味的に，主として 3 つのカテゴリーに分けられると思う．

第一のカテゴリーは‘私を子ども扱いすることが多い’‘私を父親（母親）に頼らせようとする’‘父親（母親）がそばにいないと自分のことができ

ない子だ，と私の事を考えている’という質問群であるが，これらに関しては若干 care が入る傾向が入り‘過保護だ’に関しては care の要素がかなり強くなる．

overprotection の質問項目群のうち，これら 4 つの質問は退行促進的な養育であり，土居(1971)の「甘え理論」を連想させる．甘えは何不足なく身の回りの世話をしてもらえる状態であり，母子分離の事実を否定するものであるとした上で，土居(1971) は鈴木大拙の「東洋人の根底には母があり，母は無条件の愛で何もかも抱擁する．よいとか悪いとかいわぬ.いずれにしても併呑して,改めず，あやうからずである.」に対して，これは甘えの賛美であるとしている．母親の PBI にだけではなく父親の PBI にもこの傾向が見られたのは，日本人の根底にある母親への甘えは母親に対するものだけではなく，その他の重要な人にも存在するということかもしれない．そして，Frank (1993) は甘えは Balint (1952) の一次愛との共通点を述べているように，前エディプス期的な発達段階の特徴を持ちつつ，日本ではそれが弱められはしても生涯を通して明白に認められたまま許容されているという点を指摘している．

湯沢 (1990) は，親子関係の日本的特性の一つに「大人になることを急がせない．大人になることをむしろ拒む．いつまでも子どもでいるほうが親にとってうれしい.」と述べている．他方，欧米では，「早く独立すること，自信を持つこと，しっかりとした信念に基づいた確信を持つこと.」が，大切なこととされていることを挙げている．

日本の親の子どもにいつまでも子どもにしておきたい願望は，子どもにその期待に応えさせ，子どももそれを良いことと捉えがちになり，社会に出て行くことに対して阻害的に影響する可能性もある (小倉, 1984) ．

しかし，他方で治療論の中で小倉 (1980) は，退行によって精神的なエネルギーの蓄積をはかり，それをもって人格の統合修復が可能になるとしている．一過性の退行促進的な環境は，社会の中で辛い体験がっても再び社会に出て行けるための充電といった意味を持つものかも知れず，決してネガティブなイメージではなく，むしろ care と捉えることも可能ではないだろうか．

Jung 的に考えれば，子どもを思うあまり飲み込んでしまう母親像 (devouring mother) が思い出される (横山, 2001)．暖かい世話をする母親の愛情，子どもを飲み込んでしまう破壊性といった二面性はどこの文化でも普遍的に見られるようである．

第二のカテゴリーは‘大人びてくるのを喜ばない’という質問であるが，これに関しては，overprotection の質問項目の中でも「感知しない.」というニュアンスを感じさせる項目であり，care の軸においては負の方向に知覚され，無関心，拒絶的とか知覚される傾向が強い．

第三のカテゴリーは，他の’私がしようとする事を全てにわたってコントロールしようとする’‘私のプライバシーを侵害する’といった質問群でこれらは束縛や権利の侵害といったことを表し，overprotection に対する因子負荷量が前述の項目群よりも高く見られ，care の要素はほとんどない．前述の第一のカテゴリーと異なるところは，子どもの万能的な期待に沿って世話をするというニュアンスが感じられず，子どもの意思を無視して親の欲求にそって子どもに押し付けるという印象がもたれるところである．

<u>overprotection の逆転項目</u>

また overprotection の逆転項目は本来は自律や独立の尊重を意味しているが，’好きなことをさせてくれる’‘できる限り自由にさせてくれる’‘好きなときに外出させてくれる’‘私が好きな服を着させてくれる’などは，第一因子の care への因子負荷量のほうが，第二因子への因子負荷量よりも高い．‘好きな服を着させてくれる’という質問に関しては服は「選択」するのではなく対象から与えてもらい自分のものにするというという「取り入れ」の意味を持っていることがその理由として考えられるかもしれない．

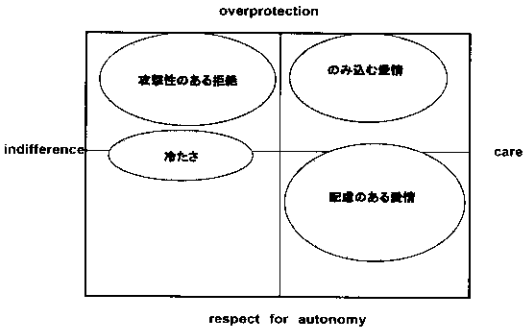
さらに‘自分で意思決定をするのを好ましく思ってくれる’や‘物事を私に任せてくれる’というのは，大人になればより「権利，自律の尊重」と捉えられるが，子どもの場合は care と捉えられる傾向がある．これは「配慮，受容」として捉えられることがその一因かもしれない．特にこの傾向が男児と母親との間の関係において，強く見られた．もともとの care の非逆転項目と，これらの overprotection の逆転質問項目は養育する側の性別，養育される側の性別や世代によっては一体化する傾向があったが，この 2 群の質問の共通点として考えられるのは，摩擦がなく対峙しないで侵入的過ぎず遠ざけるわけではない暖かい関係の中で情緒体験を共有し配慮するというものと考えうる．湯沢(1990) は，日本においては「自立」よりも「協調性」が大事であり，「自己責任」より「相互強調主義」が大事であると述べている．今日では日本も変貌をとげ個人主義化しているが「個人」という概念が西洋社会よりも遅れて出てきたため，自律，権利の侵害といった考え方は未だ一般的ではないのかも知れず，その care や配慮，言わなくても欲求を配慮し許容されたり気づいてもらえる期待が強く，そして言葉に言い表されない万能的な依存があるようだ．ここでも Balint (1968) の言葉

の通用しない基底欠損領域が連想される.

因子負荷プロットの領域ごとの意味

図9に, 図1~図6の因子負荷プロットを検討した結果, 領域ごとの被養育体験の内容を質問群の内容と散布から命名した.

図9: 各領域の被養育体験の意味



care(−)とoverprotection(−)にかこまれた領域に相当する質問項目が殆どなかったのは,「care」がなくて,「自律, 独立を尊重」するということは実際には生じにくいことかもしれない. つまり養育者から傍にいて, careを十分にされたうえで, 子どもは自信を持って葛藤にも耐えながら自分で決定していく力を身につけていくのであると思う. ほどよいcareを十分にされなければ, 自己決定していく健康さは育ちにくい.

Kenneth ら(1996) によればcareやwarmthといった因子は他のoverprotectionやauthoritarianismよりも遺伝的要因によって大きな役割を演じると述べている. と言うことはwarmthは他の因子よりも後天的な要素が少ないということが言える.

Kenneth ら (1996) によれば, 養育を受けている子どもに尋ねるか養育をしている親に尋ねるかによってそれが遺伝的な要素が大きくなるのか環境的な要素が大きくなるのかは別として, この因子は過去の研究においては, warmth, nurturance, care, loving, positive, affection, acceptance といった用語で様々に命名されてきた (Holden ら 1989, Perris ら 1980, Plomin ら 1994, Raskin ら 1971, Schaefer 1965.) と述べている . careはどの時代, 社会でもある程度, 安定して抽出される普遍的な因子なのかも知れない.

さらに自律や独立という言葉は古くからあったと思われるが, 古くは国家や都市国家に対して使用された言葉であり, これが個人の自律の尊重という考えに結びついたのは,

近代以降であるとされる. つまりこれが育児の要素に取り込まれるようになったのはごく最近のことかもしれない.

人間の歴史上も個人の発達上においてもこの概念を持つようになるのはかなり後になってからなのであろうか. もしPBIを近代以前に作成していたらcareの因子だけで構成されていたかもしれない.

因子構造モデル

因子構造モデルについての考察であるが, この二つのcareの逆転項目とoverprotectionの非逆転項目の誤差変動の+0.4の相関が認められたが, その要素は無慈悲な攻撃性といったものだと思われる.

養育を受ける側の性別に関して言えば, 男性のほうが, overprotectionとして捉えるのに対し, 女性はcareとして捉えやすい. 男性は, 攻撃と取るのに対し女性では冷たさ, 無関心と言う風に捉えるという前述の説明と一致する.

親の世代のほうが, care だけではなく, overprotectionという概念でもってみる傾向が強くなる. 大人になるにつれて「自律, 独立の尊重」として捉えるようになり, 一人の個人としての権利を尊重するという考え方はまず他者からの適度なcareを受けたと感じられることが重要で, さらに適切な教育やさまざまな体験を通して育まれていくということかも知れない.

Machinnon, A. J. (1989) らは, 婚姻状況や子どもの有無がPBIに影響すると述べている. 子どものいる成人を子どものいない成人と比較した場合, 父親に対して overprotection の程度を低く評価するとしている. さらに子どものいる男性はいない男性よりも自分自身の母親に対してoverprotectionの程度を高く, そして子どものいる女性は母親に対して overprotection の程度を低く評価するとしている. さらに考察の中で, かつての養育体験が, 子どもの有無を規定するという考え方もあるが, むしろ子どもを持つことで自分自身の親の過去の養育態度への評価, 特にoverprotectionにおいて変わると考えるのが妥当としている.

今回の我々の研究では子どものいない大人は対象とならなかったが今後「親になること」と「過去の被養育体験」の関係は興味が持たれるところである.

また養育を与える側の性別に関しては, 同じ行為をしても母親に対してはcareの軸で捉え, 父親に対しては overprotection の軸で捉えるようである. 前述のように母子関係がより原初的でありcareの要素だけで知覚されがちであるが, 父子関係によってより複雑な被養育体験を育んでいくとも考えうる. また,「母性」「父性」という人々が日本文化の中で人々がある程度普遍的に持っている鋳型によって生じるものかも知れない.

さらに年齢の因子構造モデルに及ぼす影響であ

るが，親の世代では影響はほぼ皆無であった．つまり大人になってからは年を重ねていっても因子構造は変わらない．しかし子どもの場合は，年齢は，care に対しても overprotection に対しても負の因果係数を取ることが分かった．これは男児女児でさほど差が認められなかった．この前思春期から思春期の前半の期間においては，成長するにつれて care，overprotection の因子において被養育体験を評価する傾向が低下する．しかし，今回対象にした子どもは小学校 4 年生から中学校 3 年生であるため，その幅は限られている．幅広い範囲の年齢において今後，検討する必要がある．思春期後期，青年期前期において，より大人の世代の因子構造に近づいていく可能性がある．

世代間伝達

世代間伝達に関しては，今回ははっきりとしたものが見出せなかったが，先に述べたように care，overprotection といった育児体験が多面的に発展していく原型のようなものが子どもの中に存在し，これは親の養育を含めた周囲の大人によるケアや指導によって後天的に育まれていくものと思われる．そして，父親的役割，母親的役割はそれぞれに重要であるようだ．

今回の調査はあくまでも養育される側の知覚に基づくものであり，必ずしも父親から受けたものと知覚したもの，あるいは母親から受けたものと知覚したものが一致するわけではなく，その他の人との関係からも影響を受けていたり，父親の中から「母親的なもの」と知覚していたり，その逆もありうる．こういう意味では子どもをとりまく養育環境は多面的であり，奥行きのあるケア，指導が受けられることが，後々に育児を多次元で捉えられるようになっていくものと思われる．

しかし，他方で，過去に care を十分に受けたと感じていない親が care を十分に受けたと感じている親よりも，care に満ちた育児ができないのではないということも重要な所見である．これまでに家族論，精神分析，児童虐待，乳幼児精神医学の領域でさまざまに世代間伝達については論じられてきた．

その例として，阿闍世コンプレックスが想起される．最初は母親は夫をつなぎとめるために，予言者に 3 年経てば仙人の死の生まれ変わりとして子どもを胎内に宿すと予言され，3 年を待ちきれず仙人を殺害してしまい身ごもった子どもであった．つまりこの子どもは自分が殺害した仙人の生まれ変わりであり，自己の葛藤を母親が赤ん坊に投影し，迫害的な赤ん坊に対する恐れはどの母親においても共通して潜んでいるものであると小此木 (2001) は書いている．生まれてくる子どもに対する母親である韋堤希の殺意と，出世後に子どもである阿闍世がそれを知って母親への殺意を抱き，それによる処罰型罪責感ゆえに流注という悪病に罹患し，今度はそれに対して償うがごとく母親が息子の看病をする物語である．この物語は，現在の育児困難を訴える母親に多く見られ，かつての自分の母親との関係，子どもの父親との関係，同胞との関係などさまざまなものが子どもに投影される(深津 2001)．この物語では，母親が自分の身を守るために，あるいは自分の欲望から子どもを欲しいと思い，他方では子どもを生みたくない気持ちを抱いたり，さまざまな迫害的イメージや憎しみを生まれてくる赤ん坊に投影することによって，その赤ん坊を抹殺しようとする心理を描き出している．大日向 (2000) によれば，日本人の心には慈愛，あたたかさ，献身，無償の愛というイメージで色づけられた心像としての聖母像があり，母性愛を疑うことへの抵抗があるのだと言う．最近では女性の価値観が多様化したためそうではない逆の側面も口にはできるようになってきたがこの側面は長い間否認されてきたのかもしれない．

虐待の世代間伝達では Kemp (1962) によって虐待の世代間伝達は心理モデル化されたが，これに対しては心理モデルのみで世代間伝達を説明することへの批判もある．

Buchman (1996) は，虐待の世代間伝達の社会政治的要因，文化的要因，心理的要因，生物学的要因に分けて考察をしている．この視点に立ってみれば，今回は比較的，均一な文化の中でしかも経済的状況も違わない家庭を対象に調査したため，世代間伝達が明確に出なかったのかも知れない．

Harman (1992) は，被虐待者は自分の子どもが自分のに似た悲しい運命に遭いはしないかと心底恐れており，その予防にこころを砕いているとし，一般に思い込まれている「虐待の世代間伝達」に反して，大多数の生存者は自分の子どもを虐待もせず放置もしないと述べている．過去に虐待を体験した親が来院したときに臨床家は作り上げられた知識—世代間伝達—に関する過度の懸念でもって接するのでなく，暖かいサポートをするすることが質のよい育児につながるものと思う．当然，虐待の連鎖が見られるケースはあろうが心理モデルのみで説明しようとするのではなく，社会的，経済的な問題などもあるので，さまざまな観点からの多種の専門職がかかわる包括的なアプローチが必要であろう．

PBI の再現性

最後に PBI の再現性について考察してみたい．

Parker ら (1979) によれば非患者群における 3

週間の間隔でのtest-retest reliabilityはcareの質問項目に対しては0.76, protectionの質問項目に関しては0.63であり比較的良好な再現性が得られている．最初はうつ状態であったが改善した患者群に対して 9 週間の間隔で施行したところ (Parker, 1983), さらに上昇して 0.87 から 0,92 の再現性が得られた．つまり感情状態によってはPBIの点数は変化しなかったと言うことになる．Wilhelm ら (1990) は非患者群と患者群における差を動機付けの違いに帰している．Plantes ら (1988) の研究でもやはり改善の見られたうつ病の外来患者を対象にしたところ 0.90 から 0.96 であった．だが入院直後の統合失調の患者群においては再現性が低いようである (Parker ら, 1982) ．だが再燃していない統合失調症においては再現性が良くなる (Warmer ら, 1988) ．つまり統合失調症においては病状に左右される．これらはいずれも短期間の再現性を見たものである．一般のアメリカ人のサンプルで 7 ヶ月の間隔で再現性を見たもの 0.79-0.81 と良好な再現性が得られている (Richman ら, 1987) ．

長期間の再現性を見たものでは, Wilhelm (1990) らの 10 年間にわたるものがあるが 0.56 から 0.72 と長期間にしては安定性のある再現性が得られている．Gotlib (1988) らは，産後の女性に 2 ないし 4 年の間隔で再現性をみているが，産後のうつ病があって改善した群でも，改善しなかった群でも，産後のうつ病がなかった群でも高い再現性が得られたとしている．

しかし今回の我々の研究では，短期間の間隔であったのにもかかわらず，再現性は低かった．状況によって変化しないはずの過去の被養育体験としてのPBIの値の再現性が特に女性において低かった．これは今回の質問紙の形式が再現性の探索を目的とするものではなく他の質問も数多く含まれていて特にそのことを意識させる構造にはなっていなかったこと，回答者はたまたま子どもが二人以上いることで偶発的に複数回回答することになったことなどが挙げられると思う．

ここでこの結果を臨床面にどのように適用できるかを考察すれば，もし女性のほうが過去の体験に関する尺度全てにおいて再現性が低いとすれば，女性のほうが過去の体験の意味づけが変わりやすいということになるし別の捉え方をすればより柔軟であるとも言え，精神療法等への医療との関係においての易反応性につながるであろう．もしこれが過去の被養育体験のみに関して見られる特徴であるとすれば，女性のほうが現在の育児に携わる機会が多く現在の親としての立場や置かれている状況によって過去の被養育体験の評価が影響を受けやすいこと，そして個々の子どもとの関係が過去の被養育体験と二枚重ねになりやすいことが考えられる．

さらにこれらの傾向がcareの逆転項目に関して強く見られたのであるが，このことに関しては偶然なのか，もしくは何か意味のあるものかは不明である．

今回の我々の研究では二度以上回答した被験者は少なかったので，これをもってしてPBIの再現性が低いということは言えない．これに関する研究は今後も必要となってくる．

F 結論

我々の研究におけるPBIの探索的因子分析ではParker らの因子分析とは，2 因子モデルであっても 2 因子間に相関があることと，逆転項目が非逆転項目と完全には逆の意味を持たないという 2 点において異なっていた．

PBI の因子構造は，世代，養育する側の性別，養育される側の性別によって影響をうける．また子どもでは年齢によって因子構造が変化するが，大人では年齢によって因子構造は変化しなかった．

育児様式の世代間伝達は証明されなかった．

PBI の再現性に関してはさらなる研究が必要である．

G limitation

今回，子どもに対してのPBI の調査をも試みたが，現在進行形の被養育体験の場合，そのときは権利が侵害されていると自覚していなくても，後になって実感することである．前に述べた知覚の歪曲に相当するものである．しかし年齢による変化を捉えることが今回の研究の目的の一つであったため，この結果に対しては意味深いと思われた．

年齢の因子構造への影響については前に述べたように，調査の対象になった子どもの年齢幅が限られている．高校生以降のPBIの因子構造にも興味が持たれる．

育児様式の世代間伝播に関してはメカニズムは単純ではなくそこには介在する要因が無数にあると思われる．子どもが発達の障害，反抗，複雑な家庭内の事情，経済的な問題，社会的孤立，文化的要因などにより，育児の多様性が生じるのは想像できる．また世代間伝達を調べるのは，親の世代と子の世代で，質問の意味するところがおそらく異なるため，相関係数で一概に比べた結果が正確とは言えない．

引用文献

Arrindel W. A. Hanewald, G. J. F. P. & Kolk A. M. (1989). Cross-national constancy of dimen-

sions of parental rearing style: the Deutch version of the Parental Bonding Instrument (PBI). Personality and individual Differences 10, 949-956.

Balint, M. (1952). Primary Love and Psychoanalytic Technique. 森茂起, 枡矢和子, 中井久夫訳. (1999). 一次愛と精神分析的技法. みすず書房.

Balint, M. (1968). Basic Fault: therapeutic aspects of regression. 中井久夫訳. (1978). 治療論からみた退行—基底欠損の精神分析. 金剛出版.

Bentler, P. M. (1990). Comparative fit indexes in structural models. Psychological Bulletin 2, 238-246.

Buchman A. (1996). Cycles of Child Maltreatment. University of Oxford, UK. John Willey & Sons.

Carter, E. & McGoldrick(1980). Family LifeCycle: A Framework for Family Therapy. Gardiner Press, New York.

Cole, D. F. A. (1987). Utility of confirmatory factor analysis in test validation research. Journal of Consulting and Clinical Psychology 55, 584-594.

Cubis, J., Lewin T., & Dawes, F. (1989). Australian adolescents' perceptions of their parents. Australian and New Zealand Journal of Psychiatry 23, 35-47.

Cuttance, P. (1987). Issues and problems in the application of structural equation models. In Structural Modeling by Example, pp.241-279. Cambridge University Press: New York.

Derogatis, L. R., Serio J. C. & Cleary, P. A. (1972). An empirical comparison of three indices of factorial similarity. Psychological Reports 30, 791-804.

土居健郎 (1971) 甘えの構造. 弘文堂.

Frank, A. J. (1993). Dependency and Japanese Socialization: Psychoanalytic and Anthropological Investigation into Amae. 甘えと依存. 江口重幸, 五木田紳訳. (1995). 弘文堂. PP1-188.

深津千賀子 (2001). 育児困難の母親に見られる'韋堤希の葛藤. 阿闍世故コンプレックス. 創元社. Pp250-267.

Gomez-Beneyto, M., Pedros, A., Tomas, A., Aguilar, K. & Leal, C. (1993). Psychometric properties of the parental bonding instrument in a Spanish sample. Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology 28, 252-255.

Gotlib, I. H., Mount, J. H., Cordy N. I. & Whiffen V.E. (1988). Depression and perceptions of early parenting: a longitudinal investigation. British Journal Psychiatry, 152, 24-27.

Harman, J. L. (1992). Trauma and Recovery. 心的外傷と回復. みすず書房. 中井久夫訳. (1999). PP147-180.

Hinshelwood, R. D. (1994). Clinical Klein. 福本修, 木部則雄, 平井正三 訳(1999). クルニカルクライン. 誠信書房. PP56-77.

Holeden, G. W. & Edwards L. A. (1989) : Parental attitudes toward child rearing: instruments, issues, and implications. Psychological Bulletin, 106, 29-58.

Hudziak, J. J., Beijsterveldt, C. E. M., Bartels, M., Rietvelt, M. J. H., Rettew, D. C., Dreks, E. M., & Boomsma, D. I. (2003). Individual differences in aggression: genetic analyses by age, gender, and information in 3-, 7-, and 10-yaer-old Dutch twins. Behavior Genetics 33, 575-589.

Kazarian, S. S., Baker,B. & Helmes, E. (1987). The parental bonding instrument: factorial structure. British Journal of Clinical Psychology 26, 231-232.

Kemp, C. H., Silverman, F. N., Steele, C. B., Droemeueller, W., & Silver, H. K. (1962). The Battered Child Syndrome. Journal of the American Medical Association. 181, 105-112.

Kendler, K. S., Murphy, E., Brewin, C. R. & Silka, L. (1997). Parenting: a genetic-epidemiologic perspective. American Journal of Psychiatry 153, 11-20.

Kenneth, S., Kendler, M. D. (1996). Parenting: A Genetic-epidemiologic perspective. American Journal of Psychiatry, 153, 11-20.

Klein, M. (1946). 'Notes on some schizoid mechanisms', in The Writings of Melanie Klein, vol. 3, Envy and Gratitude and other Works, London: Hogarth Press, 1-24.

Levinson, D. & Malone, M. (1989). Family Violence in cross-cultural Perspective. Newbury Park, CA: Sage.

Lebovici, S. (1998). Fantasmatic interaction and intergenerational transmission. Infant Mental Health Journal, 9, 10-19.

Mackinnon, A. J., Henderson, A. S., Scott, R. & Duncan-Jones. (1989). The Parental Bonding Instrument (PBI): an epidemiological study in a

general population sample. Psychological Medicine, 19, 1023-1034.

Mackinnon, A. J., Henderson, A. S. & Andrews, G. (1990). The Parental Bonding Instrument: a Measure of Perceived or Actual Parental Behavior? Acta Psychiatrica Scandinavica, 83, 153-159.

Mackinnon, A. J., Henderson, A. S. & Andrews, G. (1993). Parental 'affectionless control as an antecedent to adult depression : a risk factor refined. Psychological Medicine 23, 135-141.

Maras, A., Laucht M., Gerdes, D. Wilhelm, C., Lewicka, S., Haack, D., Malisoza, L. & Schmidt, MH.: Association of testosterone and dihydroxyrtestosterone with externalixing behavior in adolescent boys and girls. Psychoneuroendocrinology. 28, 932-940.

村本詔司 (1974). ある視線恐怖のいきざまー秘密論的考察. 臨床心理事例研究Ⅰ.

Murphy E., Brewin, C. R. & Silka, L. (1997). The assessment of parenting using the Parental Bonding Instrument: two or three factors? Psychological Medicene 27, 333-342.

小倉清(1980). 子どもの精神療法. 岩崎学術出版社. PP. 1-32.

小倉清 (1984). こころのせかい「私」はだれ ? (1984) 彩古書房. 第5章. 心の成長.

小此木啓吾(2001). 阿闍世故コンプレックス論の展開. 阿闍世故コンプレックス. 創元社. PP4-58.

大日向雅美 (2000). 母性愛神話の罠. 日本評論社.

Parker, G., Tupling, H. & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. British Journal of Medical Psychology, 52, 1-10.

Parker, G. Fairley M., Greenwood J., Jurd, S. & Silove D. (1982). Parental representations of schizophrenics and their association with onset and course of Schizophrenia. British Journal of psychiatry, 141, 573-581.

Parker, G. (1983). Parental overprotection: a risk factor in psychosocial development. New York : Grune & Stratton.

Parker, G. (1989). Validating an experimental measure of parental style: the use of a twin sample. Acta Psychiatrica Scandinavica,73, 22-27.

Perris C., Jacobsson L., Lindstrom H., von Knorring L. & Perris H. (1980). Development of a new inventory for assessing memories of parental rearing behavior. Acta Psychiatrica Scandinavica, 61, 265-274.

Plantes. M. M. .,Prusoff B. A., Brennan J & Parker G. (1988). Parental representations of depressed outpatients from a U. S. sample. Journal of Affective Disorders, 15, 149-155.

Plomin R., Reiss D., Hetherington E. M. & Howe GW.(1994). Nature and nurture: genetic contributions to measure of the family environment, Developemental Psychology, 30, 32-43.

Raskin A., Boothe H. H., Reatig N. A., Schulrterbrandt J. G. & Odle D. (1971). Factor analysis of normal and depressed patients' memories of parental behavior. Psychological Report, 29, 871-879.

Richman, JA. & Flaherty J. A. (1987). Adult psychological assets and depressive mood over time: effects of internalized attachments. Journal of Nervous and Mental Disease. 175, 703-712.

Maris, R. W., Berman, A. L. & Silverman, M. M. (2000). Comprehensive textbook of Suicidology, PP.145-169, Gilford Press.

Sato, T. Narita, T. Hirono, K. Kusunoki, K. Sakado, K. & Uehara, K. (1999). Confirmatory factor analysis in a Japanese population, Psychological Medicine 29, 127-133.

Schaefer E. S. (1965). A configurational analysis of children's report. Journal of Consulting Psychology, 29, 552-557.

竹内美香, 鈴木忠治, 北村俊則(1989). 両親の養育態度に関する因子分析的研究. 周産期医学. 19, 852-856.

氏原寛 (1998). 転移逆転移に関する覚え書. 転移/逆転移—臨床の立場からー. 人文書院. PP11-30.

Wamer, R. & Atkinson, M. (1988). The relationship between schizophrenic patients' perceptions of their parent and the course of their illness. British Journal of Psychiatry, 153, 344-353.

Whitening, B. B., & Edwards, C. P. (1988). Children of Different Worlds. Cambridge, MA. Harvard University Press.

Wilhelm, K., & Parker, G. (1990). Reliability of the parental bonding instrument and intimate bond measure scales. Australian and New Zealand Journal of Psychiatry 24, 100-202.

横山博(2001), 母性原理と阿闍世故コンプレック

スーユング派の視点から．　阿闍世故コンプレックス．創元社．　PP270-285.
湯沢雍彦 (1990)．親子関係の日本的特性．－家族問題の社会学・3．精神保健専門講座．財団法人　安田生命社会事業団．1-70.

厚生労働科学研究費補助金分担研究報告書

パーソナリティと養育環境に関する研究

研究協力者
鹿井　典子　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野
宇治　雅代　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野
陳　　孜　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野
平村　英寿　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野
松岡　奈緒　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野
主任研究者
北村　俊則　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野

研究要旨

小学5～6年生から中学1～3年生までの男女1350名について，(1) 子どものパーソナリティと両親の養育態度との関連 (2) 子どものパーソナリティと両親のパーソナリティとの関連について，検証をおこなった．パーソナリティの測定には Temperament and Character Inventory (TCI) を使い，両親の養育態度は Parental Bonding Instrument (PBI) を使って測定した．子どもの TCI 各下位尺度を各々従属変数とし，両親の PBI ケア得点・過干渉得点を独立変数としてステップワイズ法を使った重回帰分析を行った．次に子どもの TCI 各下位尺度を従属変数，両親の TCI の下位尺度を独立変数としてステップワイズ法で重回帰分析を行った．結果からは子どものパーソナリティが父親，母親の PBI ケア得点と関連し，一部は母親の過干渉得点とも関連があることが明らかになった．特に母親の PBI ケア得点は子どものパーソナリティの気質，性格両方に影響していた．子どものパーソナリティと両親のパーソナリティの関係は子どもの TCI の気質部分のうち harm avoidance と，父親，母親両方の harm avoidance とが関連していた．10歳から16歳を対象とした自己記入式尺度であるために評価に一定の限界はあるものと考えられる．結果から両親の養育態度は子どものパーソナリティ発達にとっての重要な予測因子となるであろうことが示唆された．

A．研究目的

近年，青少年のひきこもり，いじめ，薬物，非行，犯罪，自殺，自傷行為，不登校，等々の低年齢化増加傾向が指摘されている．この思春期の子どもたちの社会的な不適応や逸脱という問題は子ども自身の内的なパーソナリティの発達課題と大きくかかわる問題である．一方で，離別，虐待，家庭内暴力等の家族内の問題，少子化，女性の社会進出，男女機会均等，核家族化，育児支援制度の不備等の社会的側面の問題もまた子どもたちの生育環境を考えるうえで大きな社会的，現実的課題である．家族は個人の存在，心身の成長発達のありようを大きく規定するが，家族の形態，機能が変容しつつある現状を考える時，とりわけ子どもの養育機能の弱体化が憂慮される(村瀬, 1998)．これらの背景にはさまざまな側面が考えられるが，そのなかでも養育環境としての父母の影響は子のパーソナリティの発達形成にとって重要である．ここでは10~16歳の青少年のパーソナリティの特徴を，環境因子としての親の養育態度と親のパーソナリティ特徴との関連から検証して，予測因子を同定することを目的とする．予測因子が明らかにできるとすれば介入や制度の整備に対する社会的な課題への提言につながるものと考えられる．

個人のパーソナリティの特徴を決定しているのは遺伝（例えば Loranger, 1982）と環境（例えば Ruchkin ら, 1998）であろうと考えられる．パーソナリティやパーソナリティ障害の遺伝研究は近年多数の報告がある．生育環境がパーソナリティに与える影響についての研究には，臨床的な症例報告は多いが，実証的な研究は少ない．被養育体験とパーソナリティとの関連については境界性パーソナリティ障害，反社会性パーソナリティ障害あるいは回避性パーソナリティ障害についての報告がある（Joyce, ら, 2003）．一方で幼少期環境が子どもの行動や認知パターンを規定することを示唆する研究は多い（Dodge, 1983; Dodge ら, 1997; Egeland ら, 1983; Grusee ら, 1994; Koestner ら, 1991; Loeber ら, 1984; Patterson, 1984; 1984; Salzinger ら, 1993）．さらに，成人のパーソナリティ特性と養育環境との関連を報告した研究

（Kitamura ら，1999）では非臨床サンプルでの幼少期の親との喪失体験や，親の養育態度と成人のパーソナリティとの関連が報告されている．今回の研究では青少年期の児童のパーソナリティ特性と養育環境としての父親母親の養育態度と親のパーソナリティ特性との関連について，(1) 親の養育態度は子どものパーソナリティ形成に寄与する (2) 親のパーソナリティは子どものパーソナリティ形成に寄与するという２つの仮説を検証し，親の養育態度と親のパーソナリティの中から子どものパーソナリティを規定する因子を同定することを目的とする．

B．研究方法

対象

小学５～６年生と中学１～３年生の男女と，その父兄に自己記入式質問紙を配布，回答のあった 1547 名の小中学生のうち，有効な数 1350 名（男 638 名，女 712 名），平均年齢 12.39（SD = 1.4）父親 642 名平均年齢 44 歳（SD = 4.7）母親 863 名平均年齢 41 歳（SD = 4.1）を対象とした．

養育態度の評価

親の養育態度については定量化する評価法として，Parker ら (1979) が開発した Parental Bonding Instrument (PBI) は養育行動の基本構成をケアと過干渉という２軸でとらえている．ケア尺度（12 項目）は「情緒的な暖かさ－感情的拒否」の次元に関する養育行動を評価し，過干渉尺度（13 項目）は「厳格な統制—自立への育成」の次元に関する養育態度を評価する．ケア得点 12 項目，過干渉得点 13 項目合計 25 項目からなる自己記入式尺度である．ケアは 0～36 点で点数化され，点数が高いほど親が自分に対して愛情深く，受容的な態度で接していると評価していることを示し，逆に点数が低いほど無関心，あるいは拒絶的だと評価していることを示す．一方で過干渉は 0～39 点で，点数が高いほど親が自分を幼児扱いし，支配的，干渉的な態度で接していることを示し，点数が低いほど自立性，主体性を尊重していると評価していることを示す．

人格の評価

パーソナリティに関しては，Cloninger (1987) は気質と性格の７次元モデルを提唱している．パーソナリティの構成概念を気質 temperament の４次元と性格 character の３次元に分けて考え，気質は遺伝的影響を受け発達の初期から認められる個体の行動特徴であり，性格は周囲の環境との相互作用を経過して形成される特徴であるとした．気質が自己洞察学習行動すなわち性格の発達を動機づけるが，それによって性格が変容し，今度は逆に，性格が気質を調節するのである．このように，パーソナリティは気質と性格が相互に影響しあい発達すると考える．Cloninger らは，人間のパーソナリティを，遺伝的に規定される気質と学習によって成熟する性格に分けて考えることにより，そこから精神疾患との関連を推測した．気質には（a）Novelty Seeking (NS)＝行動上の触発（新奇性追及），探究心，衝動，浪費，無秩序，（b）Harm Avoidance (HA)＝抑制(損害回避)，予期懸念，悲観，不確実性に対する恐れ，人見知り，易疲労，（c）Reward Dependence (RD)＝維持(報酬依存)，感傷，愛着，依存，（d）Persistence (P)＝固着(固執)，持続，を考える．そして，性格には(a) Self-Directedness (SD)＝自律的個人(自己志向)，自己責任，目的志向性，臨機応変，自己受容，(b) Cooperativeness (C)＝人類社会の統合部分(協調性)，社会的受容性，共感，協力，同情心，純粋な良心，(c) Self-Transcendence (ST)＝全体としての宇宙の統合的部分(自己超越)，霊的現象の受容，自己忘却，超個人的同一化が含まれると考える．ちなみに気質の NS，HA，RD はそれぞれ中枢神経内の dopamine, serotonin, noradrenaline の神経伝達物質の分泌と代謝に依存しているものであると想定されている (Cloninger, 1987).

気質を 4 次元，性格を 3 次元に分けて測定する自己記入式尺度 Temperament and Character Inventory (TCI) が開発されている．日本語版 TCI（木島ら, 1996) が開発されており内的整合性および構成概念妥当性の確認が行われている．

4 つの気質尺度 HA（20 項目），NS（20 項目），RD（15 項目），P（5 項目）と 3 つの性格尺度 SD（25 項目），C（25 項目），ST（15 項目）がある．さらに子ども版の 108 項目からなる Junior Temperament and Character Inventory（JTCI; 菅原 ら，1997）が開発されており，今回の研究では子どものパーソナリティ傾向は JTCI で評価し親のパーソナリティ傾向は TCI で評価した．

解析方法

解析には SPSS10.0 for Windows を使った．

子どもが評価した父親，母親のケア得点・過干渉得点と子どもの JTCI の７下位尺度との２相関を見た後に，見かけの要因を排除するために子どもの JTCI 各下位尺度（NS, HA, RD, P, SD, C, ST）を各々従属変数とし，父親母親のケア得点過干渉得点を独立変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った．

次に子どものパーソナリティに対する父母のパーソナリティの関連を調べるために，子どもの

JTCI 下位尺度各々に対する父母の TCI 尺度との2相関を見た後，子どもの JTCI 下位7尺度得点の各々を従属変数として父母の TCI 下位尺度得点を独立変数としてステップワイズ法で重回帰分析を行った．

C．研究結果

子のパーソナリティと父母の養育態度

子の気質について：子の NS は父親のケア得点母親のケア得点の両方に負に関連し，HA は母のケア得点と過干渉得点の両方に，RD は父親のケア得点と母親のケア得点に，P は父親のケア得点と母親のケア得点に関連があった（表1）．

子の性格について：子の SD は父親のケア得点と母親のケア得点との両方に正に関連し母の過干渉得点が負に関連していた．C については，父親母親ともにケア得点が，母親の過干渉得点は負に関連，ST では母親のケア得点と過干渉得点が関連していた．気質，性格の両方に父・母の養育態度の少なからぬ影響が考えられるが，特に母の養育態度は全体に大きいことが示唆された．

表1．子のパーソナリティと父母の養育態度

	子のパーソナリティ						
	NS	HA	RD	P	SD	C	ST
父の養育態度							
ケア	-.172 ***		.110 **	.185 ***	.136 ***	.082*	
過干渉							
母の養育態度							
ケア	-.168 ***	.101 *	.220 ***	.102 *	.173 ***	.258 **	.136 ***
過干渉		.123 **			-.115 **	-.084 *	.100 *
N	844	834	863	858	814	818	848
R^2	.092	.013	.089	.067	.120	.131	.015

* P < .05; ** P < .01; *** P < .001

子どものパーソナリティと父親母親のパーソナリティ

子の HA には父母共に HA が関連しており，父の P と負の相関があり，父の SD とも関連があった．RD は父母両方の C と，P は父の C と，性格の SD は父の HA と負の相関，父の P と正の相関が，C については父母の C 両方と関連があった．子の C は父の C 母の C ともに関連があった．子の ST は母の SD と ST とに関連した（表2）．

表2．子のパーソナリティと父母のパーソナリティ

	子のパーソナリティ						
	NS	HA	RD	P	SD	C	ST
父親のパーソナリティ							
NS							
HA		.237 ***			-.138 **		
RD							
P		-.116 *			.134 **		
SD		.134 *					
C			.154 **	.121 *		.178 ***	
ST							
N	385	389	397	398	380	382	394
R^2	.019	.064	.024	.015	.043	.032	.017